

第二期 第二十五号 (初版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.08.20 定有堂書店 発行

ミニコミ好き

猫について

私たちは点滅している

遠いようで近い話

夏来にけらし

7月の日記

私がこの文を書くまで

ハンシヨウ

ロシア人との合宿生活 その二

鳥取あれこれ その二十四

虹を航る転身 (下)

シェア・ハッピー

行って帰ってきた場所で

STORY も HISTORY のうち

ミス研のはなし

…… 編集後記

奈良 敏行

坂本 修一

ワクサカソウヘイ

芝野 浩貴

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

うしきのどか

五百川知子

山本千津子

内田 克彦

秦卓 梅林

あきの素生

伊達 文

古賀 啓三

ドラマリア



ミニコミ好き

奈良 敏行

(定有堂 店主)

定有堂の底力、根元力って何？と聞かれれば、レジリエンスとブリコラージュと応える。やり直す力、自前でやり遂げる力とも言い換える。いずれも細々とした力なので、身の丈に集中することが必要だ。

わたしの「ミニコミ好き」も、根はそんなところに起因する。定有堂で出合う人たちのことを、「本好き」「本屋好き」「ミニコミ好き」「教室好き」と呼び習わしてきた。二つ目までは耳慣れないことではない。

最近この「ミニコミ」という用語が通じなくなっていることに気がついた。大学生と会話していると、「ZINE」「リトルプレス」は知っているが、「ミニコミ」は耳にしないという。「フリーペーパー」が一番身近なようだ。

十数年前に、博多出身の学生が尋ねてきて、「タウン誌」をつくと語った。地元の大学は、旧市街から離れているので、街中との交流を意図する人が時々現われる。街を自転車で探訪するライフスタイルが、その雑誌のモチーフだった。「で、なぜ雑誌作りを思いついたの？」と質問すると意外な答えだった。自分が好きなイラストを発表するメディアが欲しいという理由だった。「活字じゃないのね…」と驚きだった。いまだとSNSで容易に実現できることがらだが、彼女がタウン誌という小さなメディアに求めたものは、デザイン志向の「モノ的な魅力」と、街で出くわす「ヒト的な魅力」の両方だった。わたしの考える「ミニコミ」は「ヒト」が何を考えているかという方面にしか関心はない。それは「古いころ」のありようだ。

ミニコミはマスコミに対峙する言葉だ。ここが「古い」。マスコミが大勢を動かす大きな声なら、ミニコミは周囲の少数者に小さく同意を確かめる小さな声だ。人の考えを変更させる声でなく、同じ考えの人と同期していく声だ。ミニコミは「自分くくり」なのだ。言葉や活字は自己同一性を完遂するこの自分くくりの便利な道具だった。ミニコミ人間は外から固めていく外勢的志向でなく内への爆縮志向なので、「なにかをする」ために「なにかになる」というのが、とてももどかしい。いきなり書き

始めるのが身にそぐう。そのために媒体（メディア）も自分で用意するのが自然な流れだ。

小学生の頃は壁新聞を作って教室に貼り出した。文章も宇宙人もののまんがも自前だ。大学生になったときは、数校の学生と集う学生雑誌に加わった。（『大学公論』）取次（鈴木書店）を通じて生協や書店店頭にも並んだ。社会人になったら「寺小屋教室」という自主講座に参加した。ここでは『寺小屋雑誌』という紀要があった。

「自分くくり」で人と付き合うとき、文集があると便利だなと思った。他人もそう思うようで、この頃個人誌というのが流行った。情報のネットワークが狭かったので、「自分くくり」を文集にしておくと便利だったのだ。

わたしは『音信不通』という個人誌を作っていた。砂漠に消えて沈黙するランボオ伝説に憧れていたの、そういうタイトルを選んだのだった。周囲には「本好き」「書くのが好き」という人が多かったの、混ぜてという声が大きくなった。でもこれは沈黙へ向かう個人誌なので、じゃあもう一つ別に作るね、という事で『定有』を創刊した。小部数のプライベートな出来事だった。

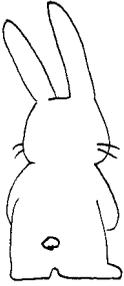
しかし本屋を始めたとき、気がついたら書店名が「定有堂書店」となっていた。いまに至るまで、ミニコミ活動はやむことがない。「リーフレット定有」「ブックレット定有」「第二期定有」「定有堂ジャーナル」と続出す

る。この二年は「第二期 音信不通」が月刊で続いている。小冊子小部数の「カストリ雑誌」（ここも古い）を意識した限りなく簡素なつくりなのだが、かつてのミニコミ時代とあきらかに違うのは、書店が刊行している以上、どんな形態であれ、これはパブリックなものだということだ。

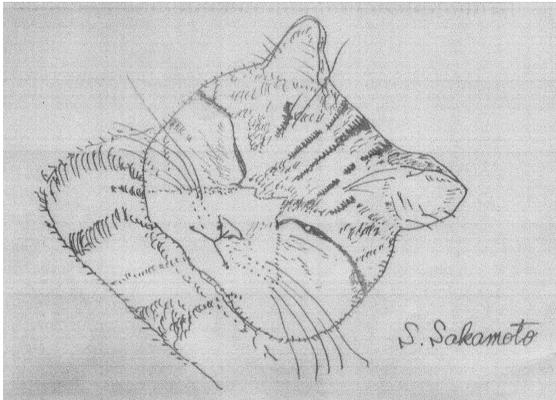
簡素でしかもパブリック、本屋もメディアなんだと知った瞬間だった。気づくのに四十年かかった。誌名を『音信不通』としたのは、しかし、このパブリックもいまではどうでもいいことだと思えてきたからに他ならない。パブリックを捨てたところにあるものは、あいも変わらず「自分くくり」という端緒への回帰だ。

「ミニコミ」は「自分くくり」だという自己完結的コミュニケーションの話になってしまった。長い年月にわたる出来事なのだ。

2018. 07. 21



猫風閣ギャラリー



猫と人間

坂本 修一

(猫風閣主人)

うちでは、娘が猫の名を呼ぶと猫も娘の名を呼び返している。決して謬見ではない。

私に返事することは少ない。それでもときどき「おとーさん」と呼び返してくる。娘ではなく、猫が。

その猫が先日受診した。尿路結石ということだった。娘によると、猫が本棚から田中康夫の『なんとなく、クリスタル』を引き出したという。その結果が尿路結石だ。うちの猫は天才なのか。

数日後、今度は犬が、目の調子を悪くして受診した。事後観察してもらうため一緒に連れて行った猫が、獣医さんに「今日は付き添いですか」と尋ねられていた。獣医さんからも、ひとかどの存在に見られているようだ。

*

猫は何匹か飼ってきたが、返事はしても呼んだ人間を呼び返す猫はいなかった。私に最もなついてくれた猫でさえ、「おとーさん」とは言ってくれなかった。

ぶーさんと呼んだその猫は、私が「寝るよ」と言うとき付いてきて蒲団に入り、雷が鳴ると私の上着にもぐりこんだ。夜中に起きると階段の下から見えてくれたこともある。会話はなくても意思疎通はできていた。

しかしそれは、娘が長期不在を終えて帰ってくるまでの間だった。娘が帰ってくるとぶーさんはすみやかに私から離れた。

今飼っている猫ははじめから私の蒲団に來ない。猫族が娘を好きなのか。はたまた娘が猫族を手なずける術を秘匿しているのか。切歯扼腕、焼きもち焼くわんだ。

*

ぶーさんの母は、成美堂出版の『日本と世界の猫のカタログ』1992年版に掲載されているイングリッシュショートヘアのチョコレートリンクスポイントにそっくりな猫だった。簡単にいうとシャムネコの茶色の部分がトラ模様になっている猫だ。ただし、顔はシャム猫のようにとがってはいない。

『日本と世界の猫のカタログ』以外にも、同じ成美堂出版の『日本と世界の犬のカタログ』1998年版、

『世界の熱帯魚カタログ』1994年版がうちにある。猫と犬と熱帯魚には、ニャーニャーワンワンウオウオと、ちよつとうるさいのだ。

その猫は、本の猫に似てはいたが野良猫だった。家族で買い物に行って帰ったら玄關にいた。きれいな猫だった。何日か様子を見て、飼い猫ではないことの確信ももてたので飼うことにした。玄關にいたことと、とても元気だったことからげんちゃんという名前にした。

*

げんちゃんが一匹ではかわいそうだということで、婿を取った。新聞で、雄のトラ猫をもらってほしいという広告を見て、当時小学生だった子ども二人と見に行った。家族で見に行くということは、いたたく姿勢だ。去勢手術費用つきだった。もらってうつちゃんと言った。名づける理由は明かせない。

去勢手術をする前にげんちゃんが妊娠し、子猫が三匹生まれた。猫の夫婦には出産後、落ちて着いてから不妊手術を受けてもらった。子猫のうち二匹はもらわれてゆき、残った一匹が先のぷーさんだった。

三匹は仮死状態で生まれた。死産だと思った。朝早くの出産だったので人間の子どもが起きないうちに埋めに出た。穴を掘りはじめたとき一匹が動いた。あとの二匹を触ってみるとやはり動いた。慌てて家に連れ帰ったの

で三匹は命拾いした。私は、私に最もなついてくれた猫を含む三つのいのちを生き埋めにするところだった。

起きてきた人間の子どもは大喜びした。

*

ぷーさんは雄で、去勢手術したため巨大化した。一時は9kg近くあったと思う。機敏な米袋だ。十五年生きて糖尿病になった。私が毎朝インシュリンを注射した。

ぷーさんが亡くなったのは朝だった。妻と娘が、庭に咲いているかぎりの花を摘んで箱に詰めた。抜けれない勤務があった。出勤前にも拘らず涙が止まらなかつた。役目を終えて午後を休ませてもらい、斎場で待ち合わせた。

*

今の猫の尿路結石の症状は、薬石効あり良好のようだ。時代の好みから推して、村上龍の『だいじょうぶマイ・フレンド』あたりを、近いうちに本棚から引つ張り出すだろう。

(にゃんぷうかく・しゅじん)

私たちは点滅している

ワクサカソウへイ

(文筆業)

が呼ばれたそのライブは、つまり「ナツノカモ」のお披露目公演に位置づけられるもので、当日の会場には彼を待ちわびていた人たちが大勢詰めかけていた。彼の光が再び灯るタイミングに立ち会えたことは、私にとっても光栄だった。

そして梅雨は遠ざかり、酷暑。

梅雨の始まり、蛍を見に行った。
ふと思いついたように点き、そしてまたすつと消える、緑色の薄い光たち。夜の小川沿いで、蛍は点滅を繰り返している。彼らは点滅することで、その存在を顕わにしている。

梅雨の終わり、私は小劇場の舞台に立った。友人に岡部という男がいて、彼が主催と主演を務めるライブに客演として呼ばれたのだ。この岡部、なかなか妙な道筋を経て、このライブの日を迎えている。

元々は立川流の落語家「立川春吾」として活躍をしていた彼。ところがある時に、「立川春吾」は突然として世から姿を消す。いわゆる廃業。自分の判断によつて落語家の道を捨てた岡部は、それから二年間、自宅での潜伏を続ける。そして先日、彼は「ナツノカモ」という屋号を掲げて、作家／役者として再び世に姿を現した。私

私はなかなか疲弊していた。原稿が進まないのだ。文字をタイプする指が、針金で縛られているような感覚。それでも書かなくや、書き続けなくや、と気だけが焦り、イライラとした日々が重なっていく。

焦燥がピークに達した瞬間、玄関のチャイムが鳴った。ドアを開けると地元の友人が立っていて、「遊びに行かないか」との誘い。しかし、仕事に追い詰められていることを理由に、私はそれを断った。友人は「そうか」と頷き、そして次の言葉が続いた。「がんばるなよ」。

その瞬間、風が吹いた。
あれ？ 私はなんで、こんなにも出力を続けることに固執しているのだろうか？

気が抜けた思いだった。そして私は一時、自分をオフにしてみることにした。仕事をすべて投げ出して、海に行き、ささやかなバカンスに身を委ねた。ああ、リフレッシュ。そして私は、やっと自分を取り戻した。

そうか、私がいま必要としていたのは、出力を続けることではなく、出力をやめることだったんだ。考えてみれば、しばらくずっと「点けっぱなし」のまま、進んでいた。

「点けっぱなし」の状態は、存在値を薄める。

もし太陽が永遠に頭上で光っていたとしたら。我々ばかりと、そこに特別な意識を向けることはないだろう。

実際の太陽は、夜が来たら地平の先に沈み、また日中でも雲に隠れたりする。そして雲の切れ間から顔を覗かせた瞬間、太陽はその存在を強く露わにする。太陽は消えたり現れたりを繰り返すことで、太陽としての存在値を高めている。

そういえば、蛍光灯が不具合を起こしてチカチカと点滅を始めると、我々はいそいそに目を向けてしまう。

キープオンとは、出力を続けることではない。点滅することだ。蛍は光を放ち続けるのではなく、オンオフを繰り返かえすことで、「ここにいるよ」と存在を主張する。岡部は自分の固執してきた落語家の道を消すことで、新たな発光体としてステージの上に姿を現す。どうやらみんな、点滅している。点滅しながら、永遠を生き続けている。

いる。

点いたり、滅したり、また点いたり。存在というものは、点滅することでやっと明らかになる。私たちは点滅している。点滅しながら、存在し続ける。だから点滅を肯定することは、自分の存在を肯定していることに他ならない。

このところ、点滅をすっかり忘れてしまっていた。「点けっぱなし」にばかりこだわりの、無理が祟るところだった。

夏が終わるまで、ちよつと「滅」のほうにスイッチを入れてみようと思っている私である。



(イラスト:あきの素生)

ヤポネシア ④ 遠くよんで近話

芝野 浩貴

(地球探作家)

もし、クレオパトラの鼻がもう少し低かったら

(山が低く川が少ない沖繩が狙われた)

もし、米軍が台湾に上陸したら…

「3回目の沖繩 嘉手納基地・読谷村 2015冬」

嘉手納基地は空軍基地だと軍用機を目的の当たりにして実感した。ちなみに海軍基地も建設しようともしている。滑走路二本(四千 m)あり、これに匹敵するのは成田空港だけである。旧日本軍の飛行場に増設。戦闘機の離発着に必要。道の駅かでの展望台と道路を隔てた俗称安保の丘(北側からはスパイの丘と呼ばれている)からF15イーグル戦闘機や対潜哨戒機を観察。騒音の大きさと飛び立つ回数は尋常でない。維持のために一日一千万円の電気料金を我々の税金でまかなっている。アメリカ国内では

三十キロ以内には基地は作れない。(国民の反対運動がある為)しかし、嘉手納では、有事があれば、深夜とかに移動する。嘉手納の町の八十三%が基地。

読谷村は、日本で一番人口の多い村で、四万千人いる。(ちなみに、二位は東海村で、四位中城村。五位北中城村と沖繩が続く)かつては、琉球で初めて明への貿易船を出したところである。

十七世紀末の尚氏の陶業政策に、支那と薩摩の影響もあわさり陶芸の村に発展した。現在は那覇からも、やちむんの里、に移住して窯を焼いているが、やちむんとはウチナーグチで陶器を意味する。しかし、1945年4月1日以降、ここは新たな意味を持つ場所となった。米軍が初上陸したところでもあり、そこから内陸に数百メートル入ればチビチリガマに至る。石灰岩でできた岩は夏は涼しく冬は暖かいので村人の憩いの場であったが、集団自決をしてからは遺骨と位牌のある場所となってしまう。遺族からの希望で立ち入り禁止となっており、観光客も中まで入れないが、四回目と五回目の沖繩訪問の昨年九月に、地元の少年に荒らされたのはショックであるとともに教育の重要性を感じた。

(ウエールズ出身のジャーナリスト・ジョン・ミッチェルからのヒアリング)

1968年8月 枯れ葉剤を運んでいたトランスグロ―

ブ号が沖縄に寄港している写真発見。1952年嘉手納基地に台風避難の名目でB52がやってきて、ベトナムへ行き、爆撃開始。1971年南部4村にPCPが水道水に紛れる。キャンプシユワブから辺野古へ流れる。

(キャンプは海兵隊用語、ベースは陸軍基地用語)

何百ものドラム缶は、北部の仮想ベトナム村で実験。(前号の三上智恵監督の映画にも出てくる高江村は仮想ベトナム村)北谷村に埋められたドラム缶の処理は日本が負担。売る、投げ捨てる、埋めるで、アスベスト、劣化ウラン、ダイオキシン、化学兵器、放射能を処理してきた。ペンタゴンは沖縄を JUNKHEAP OF THE PACIFIC(太平洋の掃き溜め)と呼んでいる。

「4回目の沖縄 摩文仁の丘・斎場御嶽・北谷アメリカ村・美ら海イノー・辺戸岬・高江村・辺野古港・金武ダム・中村家・琉球大学・首里高校2017夏」

ひめゆり平和祈念館で沖縄戦の実写フィルムを数時間見た。テレビでは流せない生々しいシーンが続いた。側にいた女学生数名がじっと目を逸らさずに食い入って見たことに希望を感じたが、フィルムで証言してる語り部は、あと数年で全員亡くなるのでいつまで口承で伝わるか不安に思った。(今年4月戦後生まれの館長就任)

辺野古の南側は浅瀬で飛行場に適し、大浦港は深いのでエンタープライズの寄港として、海兵隊八千人をグア

ムに運ぶために都合がいいと

建築家の真喜志好一氏に大量の資料で説明してもらった。今年2月、辺野古移設反対の根拠として、目崎茂和氏ら3教授が辺野古下の活断層の存在を示している。2006年メキシコで開催された数学者会議の帰りに、メキシコシティーで、裸の原住民が市役所に自治独立のデモをしているのを警察官が取り囲む姿を見た。しかし、警察官も同じ民族なので形だけの取り締まりをして、笑いながらデモする市民を応援していた。沖縄の警察官・機動隊・自衛官は、何のために県民を取り締まり、何と闘っているのか? 政治的信条を誘導したり強制するつもりはないが、それぞれの生活を守るために多角的視点で自然に寄り添う必要があるだろう。荒俣宏が「怪人」と称する目崎茂和氏は、珊瑚学・祭・神話・風水などを融合して地球の中の沖縄と向き合ってこられた。(3回目訪問の時に伺ったインタビュは次回の音信不通に続く)

辺野古沖移設のための土砂投入が数日後開始される。その頃私は6回目の沖縄訪問して、プロボノ活動中である。

もし、青谷に原発が誘致されていたら?

決して遠い他人事ではない。

夏来にけらし

ムフカミ ヒロミ

（フライング・ブックマン）

クーラーが碌に普及していなかったあの頃、夏をどう過ごしていたらう。

「いかほどの洗濯なればかく山で衣ほすてふ持統天皇」という狂歌があったが、夏は洗濯物がよく乾く。こう猛暑続きだと、午前午後2回洗ってもお釣りが来る。いやいや、そういう話をしたい訳ではなくて。

地球温暖化説は政府機関や経済界の陰謀である、という向きもあるようだが、事情はどうあれ、五十年前と比べて、夏の気温が上がっているのは間違いない。

小学生の頃、夏休みの宿題で天気と気温を毎日記録していた。ひと夏に、三十度を超える日は一、二日くらいであった。大抵は二十八、九度止まりで、だから、大台に乗ると「やったー」という感じで嬉しかったものだ。

（何が嬉しいのかよく分からんが、まあ子供のことである。嵐が近づくと妙にワクワクしてしまふのと同根だろう。非日常性への期待と憧憬ということになるうか）

デパートの記憶はないが、食堂や本屋、八百屋、スーパーマーケット、病院、郵便局、図書館などに冷房はなく、扇風機が回っているだけであった（図書館の児童室には冷茶器があったなあ）。駅前にあったサワビル（現在の花時計付近。サワバスの発着所だった。ちなみにサワバスとは日本交通の旧名）の地下に大食堂があり、ここでは「カサブランカ」に出てくるような天井扇がプルンプルンと回っていた。

バスや列車も冷房はなかった。（特急はあったかも知れない。減多に乗ることがなかったので定かでない。急行、鈍行は扇風機だった）ぬるい風に吹かれながら、白兔や東浜に出かけたものだ。どちらも遠浅で水もきれいだったので子供には安心の海水浴場だった。人が多いので、朝早くに出かけて、混み始める昼前には帰るようにしていた。

夏と言えば冷たいもの。アイスクリームも色々あったが、今でも見かけるホームランバーが好きだった。何せ、

当たりが結構出るので。双胴機のようなソーダバーも定番だった。棒が二本付いているので、真ん中で割って、二人で分けることができた。近年復刻されたメロンシャーベットは、容器が嬉しかった。容器と言えば、風船アイス（商品名は不明）という、縁日の水ヨーヨーのようなものもあった。風船の中にアイスが詰まっている訳である。真ん中を針で付くとゴムが弾けてしまうので、先端の突起部分に穴を開けて、そこからチュウチュウ吸い出す。おっぱいを呑むのと同じ要領である。

別の町に住んでいた時は、アイスクリーム売りの小父さんが、振鈴を鳴らしながら近くの広場に毎日やって来た。自転車の後ろに、店先にあるような縦長のアイスボックスを積み、その場で、丸いサーバーで、コーンの上にアイスクリームを盛ってくれた。

祖父がうどん屋をしていたので、夏はかき氷を始める。現今のフラッペのような豪華なものではなく、みぞれ、いちご、レモンのシンプルなもの。ちよつと気張って、宇治金時とミルク金時である。シロップは駄菓子屋の店頭にあるようなガラス製の広口瓶に入っていて、あの柄が長く独特の形状をした甘露杓子（近頃はシロップレードルと呼ぶらしい）で掬っていた。宇治は、片口を使い茶

筥で抹茶を立てていた。氷は、毎日、氷屋が自転車で配達に来た。ドンゴロスに包んだ氷を、店先で、切り分けていた。シャー、シャーという、鋸を引く時の独特の音がいかにも涼し気で気持ち良かった。

飲み物もあって、ラムネ、オレンジジュース、コーヒール牛乳の三種が、水を張った盥の中に氷の塊と一緒に浸かっていた。ジュースはバヤリースで、コーヒール牛乳もジュース型の真ん中のくびれた瓶に入っていた。ラムネは、あのロビー・ザ・ロボットの如き形状のガラス瓶が不思議で、栓を抜くのが楽しかった。紙の封緘を剥がし（あるいは、そのまま）ソンプレロのような形の木製の栓抜きを押し込み、ビー玉を落として開ける。飲む時のコツがあるのは御存じのとおり。

調理場に冷蔵庫があったが、これは水や食材を入れるのに使っていたようだ。何せ容量が小さい。というのも、電気を使わない氷冷式（というのか）だから。上段に氷の塊を入れ、その冷気で下段を冷やす仕組みであり、よって外気を遮断するため、扉や壁部分が金庫並に分厚かったのである。

7月の日記

坪井日記 ⑦

齊藤仁昭

(長崎書店)

6月某日

予定より2週間ばかり早く子が生まれた。午前6時27分。35時間の難産だった。陣痛の始まりから妻に付き添っていたが、妻の痛みに比べれば自分の眠気や疲労などは取るに足らないだろうなと思いきなさと尊敬の念を同時に抱いた。ベッドの傍らに立って、子が出てくる様を見たときは感動というより感嘆した。おとおお。小さいながらも力強いものですね。がんばればベビちゃん。おめでとう。あなたの成長の手伝いをできるだけがんばりますと柄にもなく思った。

本来ならば昨日の夕方に東京に着いて練習をしてから今日のライブに臨む予定だったが、陣痛が来ている妻を置いて行けるはずはなく、当日にチケットを取り直した。生まれたての子と、大仕事を終えた妻を置いていくのは申し訳なかった。ごめんよ。空港に向かう車の運転中に

眠りそうになるがなんとか堪え、羽田行の機内で爆睡する。

羽田からすぐに吉祥寺に向かいスタジオへ。練習を終えて会場入り。山本精一さんがリハーサル中で、僕の好きな曲「ラブソディア」を演奏していて聞き入った。ほんとうに素晴らしい曲。この日の山本さんはドラムに「JIM」マーチの道下さんを迎えたデュオでの演奏だった。本番の演奏も最高。

今回の主役であり、レコ発イベントに呼んでくれたすばらしかの皆さんとご挨拶。すばらしかのメンバーが、「子が生まれた日に来てくれてありがとうございます。今日生まれた子は、22世紀まで生きるかも知れないと思うと感動的だ」ということを言ってくれて、初めは何を言っているかわからなかったのだけれど、だんだん最高の祝福の言葉に思えてきて目が潤んでしまった。

ライブは楽しく出来た。久しぶりの人にもたくさん会えてよかった。お呼びいただきありがとうございます。東京では10月までライブの予定なし。

7月某日

たかやまなおみさんが数年ぶりにNHKきょうの料理に出演するとのメッセージを受信し、21時から拝見。最近訪れたというポルトガルの料理に影響を受けたレシピ。圧倒的なシンプルさに敬虔さを感じるのはなぜか。魚を

焼いただけ、トマトと玉ねぎを切っただけなのに、すぐくうまそう。そして自分で作りたくなる。最近自炊をしていない。

7月某日

ポルトガルと言えば、クリスチアーノ・ロナウドがなるとユヴェントスに移籍した。レアルマドリーがあまり好きではなかった自分は、クリスチアーノもなんとなく嫌いだった気がしていたが、日々努力を怠らず肉体を極限まで鍛え、すばらしいメンタルと集中力で試合に臨む彼はユヴェントスにびったりなじじやないかと思いはじめ、ユヴェンティノーとしてコロリと手のひらを返しファンになりそう。ポグバもユヴェに帰ってきたらいいのに。

7月某日

しばらくは妻が子と実家で暮らすため、毎日車で通うことにした。クレイジーケンバンドのライブ盤『青山24時深夜族の夜』（2008年）を引っ張り出して車中で聴く。曲も演奏も素晴らしすぎる。当時横山剣は40歳くらいだろうか。生命力がみなぎっている。自分も今年40歳だが、こんな風に周りも元気にするようなバイタリティーがうらやましい。やはりトレーニングをしなければと思うのだがものぐさはそう簡単には治らない。

*

センターフライが落ちてきて
土曜の空に張りついた
かんかん照りの太陽が
ようやく弱火になったんだ

探偵気取りで目をむいて
遠くのフェンスに飛びついた
あいつもずっと見ていたよ
煙突ばっかの海の上

でもさっきのようにはいかないぜ
でっかいボールが落ちてくる
さっきのようにはいかないぜ
でっかいボールが落ちてくる

勝手な話を繰り返して
せつかくの夏ももう終わり
なんだか物足りないのかね
ゆっくりねむって空の上

（ケバブジョンソン「センターフライ」

作詞…杉浦真寛）

私が「J」の文を書くまで

うしきのどか

(鳥取環境大学環境学部)

私がこの音信不通に寄稿する事になった切っ掛けは偶々だ。と、言うより行き当たりばったりと言うべきか。店主の奈良さんに初めてお会いし、話しかけたのが昨日。原稿のお話を頂いたのが会って2日目の今日。その1時間後には何故かレジ横のお店のパソコンでこの文章を打っている。

余りにも事の進みがテキストすぎやしないかと思う。

更に、このお店への経緯もかなりいい加減だ。大学から勧められた環境社会検定試験、通称ECO検定の試験日が、この文を書いている今日にも関わらず、昨日の午後まで何も対策をしていなかった。テキストは買ったものの問題が無かったのでどうしたものか、でも折角駅前に出たのだから先輩が薦めていた担担麺が食べたいな。という、本末転倒な思考で十一時半の開店に合わせ、役所近くの『蒼雲』に汁なし担担麺を食べるため向かった。

店に付くと、大変失礼だが、鳥取であまりお目にかかれない行列。時間の余裕はないはずなのに、十人ほどの列の後ろに私はスツと並ぶ。炎天下で最近の若者のようにスマホのゲームで時間を潰すこと十五分程。周りは二人で来ている中、お一人様の私に少しだけ早く順番が来た。

お目当ての担担麺を標準より一段階辛くして注文。モチモチとした麺と舌が痺れて水すらも刺激になってしまふ辛いタレが本当に美味しい。夏に食べるにはぴったりだ。ネットに書かれていたように残っていたタレにご飯を投下。これもかなり美味しかった。のだが、私の胃袋には量が多かったようで店を出てすぐ猛暑も相まって、歩くのが辛くなってしまった。

近くの市民会館に逃げ込むと合唱の奥様方の待合場になっていた。一人の方と私の出身の北海道を話題にテンポよく話は進む。次いで猛暑を凌ぐため冷房がある公共の場所の話になり、それなら近くに県立図書館があると教えて頂いた。そしてやっと本来の目的に戻り検定の勉強に私は取りかかるのだ。

ただ、ここは鳥取。土日は午後5時で図書館が閉まってしまう。やむなく私は六時半のバイトの時間までどこかで暇を潰さなくてはならなかった。いや、勉強をする場所を探し求めた。友達が言っていたコッペパンの専門

店『Lalacoupe』が近くにあるのを思い出した。お洒落な店内で、生クリームと餡子をサンドしたコッペパンを頬張りながら次の予定を組み立てる。そしてまた別の友達から聞いた本屋のことを思い出すのだ。

そしてようやくと定有堂の扉を押すのだ。

そんないい加減な私がこのような経緯で今回から参加することになりました。未熟者ではありますが、どうかよろしくお願いします。



ハンミョウ

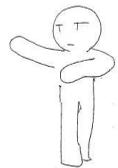
天袋より往年の登山杖

目覚めては穂高大きく夏休

月涼し被写体となる寝台車

斑猫の住処あるらし大砂丘

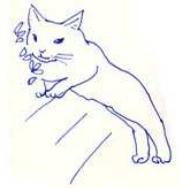
兜虫重き鼓動の伝はり来



五百川 知子

アシル

ロシア人との合宿生活 その二



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

「音信不通」第三号で、四月にロシア人と一週間を共にしたことを書いたが、今回、その彼らのところへ行ってきた。サッカーワールドカップ開催中のモスクワ、赤の広場周辺はロシアをはじめ各国の国旗を振りながら、選手と同じようなシャツや民族衣装を着て笑顔で歩く人々、何かしら楽器が奏でるメロディーや歌声があらこちらから聞こえ、世界的なイベントであることが感じられる独特の雰囲気だった。市内での警官の多さや一度ではすまない手荷物チェックに驚いたが、おかげで思っていたよりも安心して行動できた。

ロシア対クロアチア戦の日に、まさか自分の頬にロシア国旗がフェイスプリントされるとは思ってもみなかったが、その場の空気には逆らえず、「ラッシーヤ、ラッシーヤ」と思いつき叫び続けた。巻き舌のいい練習になった。女性ばかりのテーブルで、おしゃべりに夢中になっている彼女たちの話に加われない私は観戦に集中できた、初めてのパブリックビューイング。その後、クロアチアが決勝まで進んだことが何よりも嬉しい。

ロシア代表を応援する必要がなくなつてからの一週間、モスクワ中心部から車で一時間ほどのところにある道場での合宿生活が始まった。合気道のために建てられた道場はちょうど十年になる。その隣には日本の禅寺にあるような禅堂が建っていた。自分たちの手で作り上げたとは、さすがロシア人。「音信不通」に初めて書いた文章は天徳寺での座禅体験だった。それから二年後、モスクワでの座禅体験が始まった。向かい合つて座ると、私の前にはどっしりとした構えの女性がいる。まさにだるまの形、達磨大師が目に浮かぶと思わず頭を下げたくなつた。その隣に座る日本人の座禅の先生は、枯れたというか、わび・さびを体で表現されたように見え、お釈迦様はこういう姿で座っておられたのではないかと思うと、こちらにも頭を下げたくなつた。

朝にいたたくおかゆは、今まで食べてきた中で一番おいしかった。一日目のおかゆをもう少し薄くした方がいいと助言されて、二日目のおかゆは日本人の先生によると、日本の禅寺よりもおいしいと。朝一番に公案ならぬ詩の一節のようなものを与えられて、一日中考えて、一日の終わりに皆が自分の意見を言っていた。私は彼らの交わす議論にはついていけなかったのだが、声の調子や表情から楽しそうだった。決して難しいものではない公案。言葉にとらわれることなく、でも、借り物ではない自分の言葉、自分の心から出た瞬時の言葉が大切だと。

後半の三日間は禊修行と称して呼吸の鍛錬だった。道場長が合気道の上達のために、座禅と呼吸の修行を取り入れていることだった。祝詞を読み上げたり、「トホカミエミタメ」と大きな声で繰り返す。お腹から声を出すように言われても、のどをつぶして声は次第に出なくなっていく。

太鼓や鈴の音がリズムを作り出すと、心地よく感じられ、声明のようになっていきそうだったが、それでもしんどい。正座から解放されて、日本人の先生の話の聞いたり、書道体験はありがたい時間だった。厳しい修行といった感もあるが、自然や人とのおしゃべりが大好きなロシア

人だから、休憩時には庭の草の上でのんびりしたり、食べごろのベリー類を摘んで口に入れたり、石庭ではこうはいかない。そして、締めは水の行。やり方をマスターしていない私は、桶を頭の上に持つていくまでに水がこぼれてしまって「行」にならない。見かねた道場長は、私から桶を取り上げて頭からかけてくれた。麦飯に沢庵、みそ、しょうがの甘酢漬、梅干の代わりにプルーンという食事が続いた後の最終日には、自家製のウオッカとピクルス、果実ジュース、近くで釣ってきた鯉のから揚げ、ピロシキなどで宴会。

修行と名のつく非日常の世界は、彼らにとつても私にとつても贅沢な時間だった。それぞれが、また問題を抱えた日常の修行の場に戻っていく。ワールドカップのサムライジャパンとは無縁の、ロシアのサムライたちと一緒に過ごせた2018年の夏だった。別れ際にもらった言葉は「日本代表の美しいサッカーのように、我々も美しい合気道を目指す」だった。



鳥取あれこれ その二十四

内田克彦

(地域研究家)

女性運動資料集成』により、年表風に抜き書く。

一九二三年一月二七日 松本君平代議士の肝煎りで組織について帝国ホテルで相談会が開かれる。坂本真琴、西川文子ら七、八人出席。(かたの名の明記なし)

同二月二日 「婦人参政同盟」の発会式。西川座長席につき実行委員を指名するに際し「婦人禁酒会」を無視されたので会長格のかたが小さくとも会を代表して参会しているのにと少し機嫌を斜めに。数日後かたより改めて、かたと高橋千代が会を代表して実行委員承諾を西川へ通告。結局、婦人連盟、新眞婦人会、婦人禁酒会、革新クラブの各団体からと個人三名の計一五名が実行委員に。

同二月一七日 神田中央仏教会館で最初の政談演説会を開催。坂本真琴、かた等が弁士として演説。

この後、坂本はほとんど連日他の有志の者も数日間議会につめかけ婦人参政権建議案に対し各代議士に賛成を求めた。(かたの名の明記なし)

同二月二三日 普選即行示威運動に婦人参政同盟の大旗を掲げて有志の者参加。(同右)

同三月一三日 第四六回帝国議会に婦人参政権の建議案上程。松本、野次の連発の中約一時間の大雄弁。委員付託のまま二六日閉会。審議未了。(同右)

同三月一四日 第二回の演説会を明治会館で開く。(同右)

かたが禁酒運動から婦人参政権運動に入つていったのは何故だろうか。一九二七(昭和二年)三月発行の『女権』第一巻創刊号に、「何故に参政権が得たいか」と題して、次の無署名の論文が載っている。

(承前)

元来私は畢生の事業として禁酒国を実現せしむるために、大戦以前まで此運動を致して参りまして、あらゆる場合に此の禁酒を宣伝し禁酒を主張して既に微力ながらも婦人禁酒会をも主唱して極力其実現を希望して居りましたが、志のみで此の禁酒の目的は容易に成就し得ないのであります。(略)彼の国々が何うして此の禁酒を実現し得たかを研究して見ました結果、(略)皆な根本は婦人が参政権を獲得し男子同様に政治に参與することが出来るやうになつた影響が、即ち直に禁酒を実現するやうになつた

それでは、具体的にどのような組織的に動いたのか、『日本

同三月三十一日夜 松本ら三人を招待して慰労の小宴。卓上盃がふせてあり、かたの逆鱗にふれ酒一滴も出さず。

同四月一五日 臨時総会を開き次期議会開会まで一時運動中止の決議。(かたの名の明記なし)

(同九月一日 関東大震災)

同十一月二三日 かた主唱者となり高木富代らと法制審議会に選挙法改正委員を訪問、衆議院議員選挙法中性別撤廃の決議文を提出。

同十一月四日 総会を開き理事七名を互選。かた、当選。

同十一月二四日 帝国ホテルで理事会を開催。

一九二四年一月一五日 新年会を兼ね坂本宅に対議会運動の相談会を開く。(かたの名の明記なし)

同一月二七日 帝国ホテルで相談会を開催。

同一月三二日 第四回帝国議会解散。

同二月二二日 神田中央仏教会館で、高木正年選挙資金援助のため演説会を開催。西川、かたら演壇に立つ。

同六月二七日 運動資金を得るため等の理由で五月二六日音楽会を開催したが一同に謀らなかつたといつて一部不平分子があり、かつ婦人連盟から解散説が出たため、臨時総会を開き、大多数にて存続に決定、直ちに理事の改選を行い、連記投票にて、西川、かたら当選。

同七月五日 かたは坂本に宛脱会届を出す。

人間関係のこじれだろうか、婦人参政同盟にいたのは二年にも満たなかつた。その後、かたはどうしたのか。

一九二四年一〇月二六日、脱会した婦人保護協会河本亀子、婦人社会問題研究会西川文子、婦人禁酒会のかたは、「婦人参政三派連合会」を結成した。

一九二五年二月六日夜 婦人参政権獲得期成同盟会(前年一二月一三日創立)の招待を受け、三派連合会は婦人参政同盟と出席。対議会活動は共同歩調を取ることに。

同二月一一日夜 三派連合会(かた、鷲尾よし出席)と、期成同盟会、婦人参政同盟とからなる協議会を開催、第五〇回帝国議会に提出すべき議案を相談。

同二月一四日 第五回演説会開催、弁士かたら。

同二月頃 高橋千代は、かたに願つて内務省参事官に面会、市町村制改正案に婦人の公民権に関する条項はない。

同三月一〇日 議会「婦人デー」、婦人傍聴者三九〇余人吉良の質問「婦選運動者は、禽獣に等しき不節操なる女」。

同三月一二日午前一〇時 議会の第二控室で、かた、高木富代、山根菊子、高橋千代が吉良と面会。

同三月二四日 第五〇回帝国議会、建議案衆議院で可決。

(以下、続く)

二〇一八・七・四

虹を航る転身 — (下)

秦卓梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

III

「シエイクスピアは、人間の心を非常に鋭く分析し、其の非常に深いところ迄極め尽くして居たので、彼が登場人物に語らせる事は紛れも無く人間の習性であり、眞實であり、亦實際多くの事が、語られてゐるやうに成らざるを得なく成るのである」：ヴェルデイは語つてゐる。イヤーゴやオテロの心の弱さ・焦りを通し、精神の破滅に至る悲劇を描き、デスデモーナの縋り祈る神への信仰、此の世への絶望を：愛の二重唱は、過ぎ去り行くもの、或ひは既に過去のものとの対話を繰り広げ乍ら、さながら交誦や応誦の如く響き渡つてゐる。人の意志ヲ超へ二重の意味で。

IV

斯くして「オテロ」は新しひ息吹を得た。ヴァグナーの後、独逸を中心に樂劇は無数の亜流が雨後の筍のやうに生まれ消へ、一方アルプスの南ではヴェリズモの唱へ

る現實主義が單なるタブロイド調、スキヤンダルの温床と化し滅んで行つたのを尻目に、嘗てロツシーニ・ドニゼッティ・ベルリーニの亜流とも目されたヴェルデイは、大バツハ宜しく晩年に至つて佳き協力者を得て技術革新を試み続け、以前「マクベス」※に果たし得なかつた「シエイクスピアに於るヴェリズモ」を、途切れる事無く緊迫感の続く樂劇形式を借りて舞台上に見事實踐したのである。人は、功なり名を遂げた後の此の転身に、ヴェルデイの謙虚さや柔軟さばかりを称へるが、私はどっこい、其のしぶとさ、懐の寛さ、そして執念に打たれる。一見穏やかで物静かな男が最期に見せた紛う事無き強かさ！

V

まう一つの転身、即ち詩人ポイトーに目を向けやう。彼は両親からポーランドとヴェエネツィアの血を受け、イタリア最高のダンテ・シエイクスピア通と謳はれてゐた。

自身の作曲した「メフィストフェレス」やポンキエツリの浪漫歌劇「ラ・ジヨコンダ」(原作：ユゴー)の台本では、文豪達の戯曲ヲ縦横無尽に料理、何より優美さを喪はずいつも格調高く。

詩人、作曲家と多岐に渡つて活動したけれどどちらの分野にも決定的な傑作を産む事は無く、自分自身に対し

て常に正しいか否かと云ふ疑念ヲ抱いてゐたと云ふ。

そんな彼が、最期に行き着いたのが当初、敬遠してゐたヴェルディ翁だったのだ。

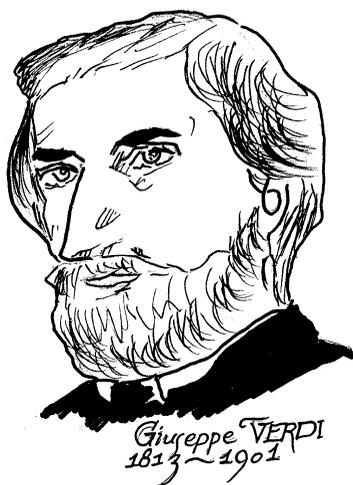
素材的・文学的なモノの価値が高まる事に拠つて歌劇の生まれ変はりを期待した慧眼は正に鋭く、彼の詳細なオペラ詩学・美学が翁との核融合に拠つて、ヴァグナーでは無くモーツアルトの要求、即ち詩が樂に隸属するのでは無く、樂の「従順な娘」と成る事が、ボイトーに依り再び掲げられ、ヴェルディに依り保証された。「オテロ」では音と言葉が、樂器は文学的思考と完璧に調和してゐる。双子のやうに。何百年にも渡つて發展を遂げて来たレチタティーヴォは「オテロ」の中で結晶し、其の可能性ヲ極めた。

シェイクスピアを①認識する事②其の宇宙の奥義を究むる事③其を描き出す事——永い樂歴の最期に入った老翁を専ら支配してゐた此の「三和音」は虹の谿ヲ越へ時ヲ超へ現在も響き航つてゐる。

2018・02・05

「今回のディスク」のヴェルディ作曲のA・ボイトー台本「オテロ」(1881〜86) ① A・トスカニーニ指揮NBC交響樂團 ② C・クライバー指揮ロゼツフィレリ演出 P・ドミンゴ、M・フレニーニ、P・カプツルリ他ミラノ・スカラ座ライヴ DVD1976. 12. 07
※「マクベス」ヴェルディ中期のオペラ(1847)、F・M・ピアアーヴェ台本、A・マッフエイ台本。

画. A. T



あきの素生

(くうねるめがね)



くれた。後でケーキを食べるし、それももちろん楽しみなのだが、泡立て器のクリームは何だか特別だった。もつと食べたいなあとも思っていた。でも、ケーキを作るのは、誕生日だったりクリスマスだったり、私と弟どちらかがいないなんてことがないときで、だからやっぱ、いつも半分こなのだった。

弟がいる。きょうだいがいれば、大概そうだと思うが、小さい頃は何でも半分こだった。ポテトチップスは、1回に食べていいのは袋の半分まで、と決まっていて、それを更に分け合って食べた。こう書くと微笑ましいようだが、2人とも1枚でも多く食べたいと思っているから、今大きいやつを食べた、そっちこそたくさん食べてるなどと、お互いの一挙手一投足に注意を払いながら、牽制し合いながらポテトチップスを食べていた気がする。

母はケーキを作るとき、生クリームを泡立てるのにハンドミキサーを使った。ハンドミキサーには2本の泡立て器が付いていて、取り外しができる。使い終わった後、母はクリーム付きの泡立て器を私と弟に1本ずつ渡して

夏休みは、当たり前だが、弟という時間がぐっと増える。毎日毎日けんかをした。「これの子あやれん(この家の子は手に負えない)」と、面倒を見に来てくれたいた祖母が嘆いていたことを、大人になってから知った。たまに冷静になり、子ども心に、「大人になっても、毎日こんなだろうか」と本気で心配したものだ。何でもけんかの理由になったが、おやつのは、ベスト(ワースト、だろうか) 3に入っただろう。

夏のおやつのは定番は、「チューチュー」と呼んでいたアイスキャンデーだった。ソーセージが2本縦に連なったような形のビニール容器に入っているアイスで、真ん中からぼきんと折って食べる。ふと、「チューチュー」って一般的な呼称なのだろうか、と思ひ、ネットで調べてみると、「チューペット」とか「ポツキンアイス」とか、いろいろな呼び名があるようだ。しかも、「元々はアイスではなく飲み物だった」「昔は真ん中のくびれがなく、

折って食べるものではなかった」といった情報が散見され、「チューチュー」に歴史あり、と変に感じ入ってしまったが、ともあれ、我が家では「チューチュー」で、真ん中から折って食べるアイスだった。

「チューチュー」食べよう、とどちらからともなく声をかけ、冷凍庫を開けるときは、2人ともにここにきて、どこから見ても仲の良いきょうだいだったことと思う。

しかし、それを折って分け合う段になって、ひと悶着あるのである。「チューチュー」は、片側の端はつるんと丸いのだが、もう一方の端には、2〜3cmの突起がある。ジュースとして飲むときには、そこを切って吸うのだろう。この突起がある方をどちらが食べるかで揉めるのだ。書いていて悲しくなるくらいせせこましい話だが、当時は真剣に争った。決まってしまうは、どちら側を食べるようになったにせよ、結局おいしく食べたし、次は交代しよう、などと、ものわかった風に話し合ったりした。

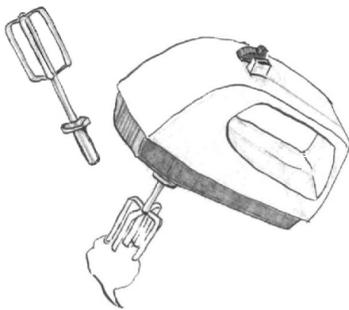
こんな夏休みを過ごしたのも小学生までだ。そうでなければ困るのだが。

数年前、法事の席だったか、お茶を飲もうとしていたら弟がやってきて、「姉ちゃん、手酌しとったら、嫁に

行けんくなるらしいで」と言いながらペットボトルを取り上げ、お茶を注いでくれたことがある。自分の言動には特段成長を感じないが、こういった弟の振る舞いで、「私たちも大人になったんだなあ」と気付かされる。

もうけんかはしない。何かを半分ずつ食べることもない。喜ばしいことなのに、何だかさみしい。競うようにして食べた、あの「チューチュー」のおいしさを味わうことはもうないのだ。

おやつ時間は午後3時。夏の陽の差し込む、台所の明るさを思い出す。



行って帰ってきた場所で

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

家の中も違う。ごちゃごちゃと物を持っていた私は、東京生活の間に、何年もかけて、すっかり暮らしへ移行した。そうするきっかけになることができ、人を介して複数あった。

そして持ち物にはそれなりの確率で、東京で出会った友人たちからもらった物、縁のある物がある。友達の家で私がすごく気に入ったら友達らの引越しのタイミングで譲り受けたランプ。友達らのギャラリで買った花瓶。もらい受けた洋服や鞆や家具やお土産。

洋服は、16年で何度も好みが変わった。ようやく今、自分はこの感じが好きだなという恰好に落ち着いてきた感がある。それもまたこの街で変わるかもしれないし、そうしたらまたこの街での私の歴史になる。

そして、16年前より、さまざまな友人がいる。近くの友人との再会。遠くになった友人とのメッセージのやりとり。たくさんやりとりのできる状態ではないから控えているけれど、ごく少数の友人と、ちよろりちよろりとやりとりしている。

東京で、いろんな人に会ったし、いろんな体験をした。今、子どものころ歩いた街をまた歩いているけれど、東京で路上観察家の友達ができ私は、もう、あのころとは違うまなざしで同じ街を見ることができ。街並みを見るだけのことを、おおいに楽しむことができる。子どもの頃は目的地に着くまでの経過でしかなかった路上の一瞬一瞬が、今ではメインですらある。

他者の見方と出会う経験ができた。

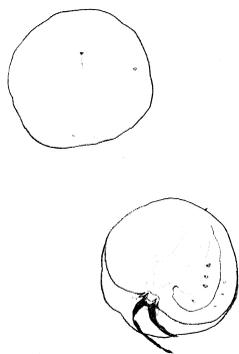
その人が何を何と呼ぶのか知ること、私の中のその人がより緻密な輪郭を描き、鮮やかになる。何かには、本当はさまざまな呼び名がある。人はそれぞれ違う絵を見ている。その描かれ方、描き方に触れる。何かへの見方も変わり、その体験を積み重ねることで、他のことへの見方もやわらかくなる。

またある日に別の友達からメールがくる。この友達とはどっしりした内容をゆったり話すことが多い。以前ならそれでもすぐ返事をしていただけ、考えられなくて、3週間ほどしてから返した。また1週間ほどたって、友人から返事がくる。相手に早く返すことよりも、自分の心地よいペースを優先すること。そのことによって、相手に敬意をはらうこと。自分を大事にしない関係を、相手との間につくらないこと。私はいつも友達からそのことを教わった。

あるいは、今同じ街に住む、そのうちランチに行きましようと言ってくださっている方と出会ったのは、東京でのイベントだった。東京での日々、たくさんイベントに出かけたし、たくさんイベントを開いたし、イベントに関係なく、ある人に会ってはその人がきつかけで別の人と友達になり、を意図するともなく芽づるのように繰り返していた。そんな連鎖が、今につながっている。

そして、ずっと考え、個人的な場ではあるけれど、ずっと書いていた。人との出会いを経て、読むものが変わり、日々を書き続けるなかで、書くものも変わった。変遷を経て、今の思考回路があり、今の言葉がある。

東京がいい場所かどうかではなく、たまたま、私には行った先が東京だった。たくさんすることに疲れて戻ってきたけれど、同じ場所に戻っても、私は同じではなくて、児童文学で出かけて帰ってきた子どものように、冒険を経て、ちよつと違った私になっている。そのことが、少しうれしくて、晴れやか。



tomato

STORY # HISTORY 6745

古賀 啓二

(米国ミシガン州 隠棲)

七月の初旬に予定していた、マダガスカルへの、数年振りに二週間というややゆつたりめの休暇旅行に携行する本として、英国の作家、グレアム・スウィフトによる「ウォーターランド」という、日本語訳で五百頁強の大部の作品を、これなら一冊でもつであらうと、半ば「量」にて選択(笑)。

「ウォーターランド」は、丸谷才一風に云うと「柄の大きい」作品で、マダガスカルという風土、風俗の悠久性に相応しく、そこを旅しながら読む読み物としてアタリであった。といつても泊まったホテル五つのうち、北部山岳帯での二ヵ所は午後五時から十時までしか電気がなく(Musi はなし)、蠟燭をサイド・テーブルに二本灯すものの、日中の熱帯雨林歩きで疲労困憊しており、数頁読むと眠りに落ちてしまふ。後半、北西部の島々に渡り、リゾート風の旅へと転じた際、キャッチアップし、読了。

「柄の大きさ」の所以は、散りばめられたパーツがやがて

収斂していく、企まれた重層性に因るのだろうが、「歴史」、「物語」、「水」といった、パーツの永遠性が寄与していることは明らかだ。

定年を目前に控えながら、妻の嬰兒誘拐により辞職を止む無くされた歴史教師が、過去の過ちを学ぶことにより、より良い未来を約束するはずの「歴史」が、「いま・ここ」の悲劇と劇に対しては無力であることを知る。「いま・ここ」の悲劇と恐怖を緩和するには、それを「物語る(ナラティブ化)」しかない。

歴史教師の父方・母方の一族についての「語り」も「百年の孤独」に於けるブエンディア家の盛衰を思わせ、マジカル・リアリズムに準拠したエピソードも華を添えているが、この母方と父方を繋ぐのが「水」である。舞台は英国東部の沼沢地帯(フェンズ)で、母方アトキンソン家は羊の牧畜、大麦農場の経営、麦芽製造、ビール醸造と事業を拡げ、その製品の流通のため、フェンズの干拓とその中央を流れるリーム川の「支配」に挑む。舟を通わせるため掘り下げ、堤防で固め、川の兩岸を排水する。「厳密に言えば、干拓が完了することはなく、あるのは干拓中という状態だけなのである。」そして父ヘンリー・クリックは、水量を調節する水門番の役を仰せつかる。零落し、事業主としては最後の代となった、アーネスト・アトキンソンの娘、ヘレンを娶うことを条件に。

「近親相姦」は、作品に「柄の大きさ」を加えるパーツのひとつでなければ、マジカル・リアリズム(血縁婚姻が続ぎ、豚の尻尾が生えた畸形児の誕生が物語の発端となる「百年の孤独」)へのオマージュであろうか。ヘンリーと結婚する際、ヘレ

ンは父アーネストによる「世界の救い主」となるべき息子(なぜかアーネストはそれが「息子」であると確信していた)を孕んでいる。

「水」であった。

『水を征服しようとするとき、いつの日にか水は立ち上がり、それまでの努力の一切が無に帰す。「万物を平坦にならそうとする性質をもち、それ自身は味も色ももたない水」という物質は、液体状の(無)にほかならない』

「それは円を描き、われわれをもとの場所に連れもどす」歴史と似ている。

マダガスカルは「ナショナル・ハイウェイ・ナンバーX」という「国道」システムを有するが、名ばかりで上下一車線ずつしかなく、市街地でも信号等、皆無。宗主国フランスから独立した一九六〇年に文明は停止した様子で、メンテが施された形跡はなし。舗装部より穴ぼこの方が多く、ドライバーはそれらを巧みに除ける(高度な)技術が要求される。

「国道」なのに道端には生活が密着していて、道に面して直ぐそこにある集落。これで商売になるのか、どれも同じようなもの(芋、米、バナナ等)を売っている、やる気のない店。固有種ゼブという牛の群れを(国道上で!)叱咤しながら、どこかに導いている男。食べ物の煮炊きをしているひと。川で着物や野菜を洗っている女たち。デザートなのか、国道に沿い、どこかへ向かつて(レストランも映画館もないもの)歩いていく着飾った若いカップル。することもなくただ屯している子供たち。

アフリカだが、マダガスカルの人々、マダガシは、陸続きであった頃インドネシアからゼブを引いて渡来したとのこと、外見や混沌も僕としては異質ではない。(きちんとしたレストランはどこも仏料理だが、メニューの隅には「マダガシ」が肩身狭そうにはあるが、必ず見つきり、それは白いご飯とニョクマム風の味付けがされた肉や魚、という紛れも無いアジア食なのである)

妻や、娘がどう感じていたかは知らないが、僕にとつて、こういった情景を眺めながらのドライブは「愉楽」、という言葉が相応しかった。

南半球の冬の熱帯の光景を車窓に見送りながら、ゆつくりともとの場所に連れもどされる感覚。

父親の転勤で東京に移るまで住んでいた、半世紀(!)ほど前の長崎では、「旧街道」などと呼ばれる、車が上下擦違ふこともままならない、沿道の民家の庇に覆われるような道があり、民家に紛れて小商いの店が点在し、川で大根を洗う老婆たちも、年長に苛められながら、日没まで徘徊する子供の群れも日常的に見掛けられた。

マダガスカルには、歴史にも、物語にも咀嚼・転化される前の記憶が、「いま・ここ」として眼前に横たわっていた。

ミス研のはなし

ドレメリア

(座敷わらし)



夏といえばミステリ。

大学生のとき、ミス研に入っていた。超常現象の方ではなく、推理小説研究会のほうで、そこでは毎年、夏にびわ湖合宿があった。

文化部、しかも実技系ではないサークルで一体何をやるのかと思われるだろうが、何もしない。三日間、安い大学の施設に泊まって、ミステリ好きな大学生がわいわいしているだけだった。リレー小説を書いたり、部員が書いた犯人当て短編を読んで推理したり。「ミステリで最も重視するのは何か」というお題で、「トリック」「ロジック」「物語」「探偵キャラ萌え(ー)」などに分かれて、論戦したり。同じ趣味を持つ仲間と過ごす三日間は楽しかったし、贅沢な夏休みだったなと今振り返ると思う。

ひとつ、心残りというか安堵したこと。当時隆盛を誇った新本格ミステリでは、大学生サークルが合宿に行くとは大体そこで事件が起き、更に外界との行き来が断たれて

「犯人はこの中にいる！」状況に陥っていた。いわゆる「クロード・サークル」ものと呼ばれるジャンルだ。高校生の頃、ミス研に入ると事件が起きるのかなとぼんやり期待していたものだが、現実はそのこととはなく、毎年何事もなく終了した。京都市内へ帰る車中で、おそらく部員の半数は思っていたのではないか。……事件、起きなかったな。と。

しかし、考えてみたら事件には犯人と被害者がいるわけ、誰も被害者にはなりたくない。起きなくてよかったのだ。



・編集後記:

あまり暑いので、ネッククーラーを装着してみました。農作業感が尋常じゃないですが、涼しくて快適。ダークカラーもあればいいのに。

ドレメリア (編集長)

人文系の版元の人にレクチャーを受け、マルクス・ガブリエル『なぜ世界は存在しないのか』を教えていたので読んでいます。認識と事実の乖離が気になるわたしなものです。「真」と「信」……。

奈良敏行 (発行人)

